

「好き」を信じる

さくらい

みなこ

福島地方気象台調査官

桜井(加藤) 美菜子 氏(高校33期)

1986(昭和61)年 気象庁入庁(水戸地方気象台)
東京管区気象台、気象庁予報部、熊谷地方気象台を経て、
2012(平成24)年 気象庁予報部予報課予報官全国予報班長
名古屋地方気象台観測予報課長、仙台管区気象台予報課長、気象庁天気相談所長、
熊谷地方気象台長を経て、
2021(令和3)年 福島地方気象台長
2023(令和5)年 満60歳を迎え再任用で現職



■立川高校で

天気図に興味を持ったのは中学2年の夏。以後漠然と、将来は天気予報を出す人になりたいと思っていました。ただ、当時は天気予報を出せるのは気象庁だけ、しかも気象庁の予報現場は女性の夜勤が禁止されていました。「なーんだ、だめか」とがっかりしつつも、さほど深刻には考えていませんでした。立川高校入学後は、迷わず「天文気象部」の門を叩きました。シフトを組んでの1日に2回の定時気象観測、太陽黒点の観測、重たい機材を担いで登った御岳山長尾平での天体観測、今は無き長野県美ヶ原の王ヶ山荘を拠点としたペルセウス座流星群の観測等々。高校三年間は、これらを通じた先輩、同期、後輩たちとの濃密で得難い時間を過ごすことが出来ました。

■気象庁で

潮目が変わってきたと感じたのは、高校2年の時でした。のちの男女雇用機会均等法に先立ち、気象庁の予報現場の夜勤や気象大学校の受験資格が女性に開放されたのです。がんばれば予報官になれるかも?! 紆余曲折の末、国家公務員試験Ⅱ種物理(当時)の枠で気象庁に入庁することになりました。最初の任地は茨城県の水戸地方気象台。1日4回の定時気象観測通報や気象測器の維持管理、地震計の記録用紙の読み取り、先輩予報官の補助など、地方気象台の現場業務を叩きこまれました。その年、1986年8月、台風第10号とそれから変わった温帯低気圧による大雨で、気象台すぐ近く的那珂川が大洪水となりました。川からあふれた茶色い水がみるみるうちにあたり一面を埋め尽くし、上流から次々流れてくる建物の残骸やトラック、水没した家屋、屋根の上に逃れた方を救出するヘリコプターなどなど、それは衝撃的なものでした。世の中の役に立つ気象情報を出していきたい、その思いの原点となる光景でした。

■在校生のみなさんへ

その後も予報関係の業務に携わることが多かったものの、14歳で抱いた「天気予報を出す人」にはなかなかたどり着けずにいました。いささか腐りかかっていた時、上司に言われました。「本当にやりたいことがあるのなら、あきらめず追いつけなさい。ただし、自分の中で思っているだけではだめ。周囲に伝わるように自分から発信しなさい。そうすれば、たとえ時間がかかっても落ち着くところに落ち着くから。」と。今思えばこれは、「とりあえず目先はがまんしろ」ということではなく、「あきらめるな、周囲の理解を得よ、そしてやるだけやったら結果にはとられるな」ということだったと理解しています。自分自身の大切な拠り所になった言葉であり、職場の後輩たちに大事に伝えています。同じ言葉を立高のみなさんにも贈ります。みなさんの将来に、幸多かれと祈りつつ。